今、君達は平和かい？

沖縄県立開邦中学校一年　謝花　日菜

「今、君達は平和かい？」

わからない。

私の家の居間には、軍服姿でりりしく写っている、若き男性のモノクロ写真が額に入れられてかざってある。その隣りには、琉装に沖縄カンプーをした、気が強そうな女の人が、男性に寄りそうようにして、同じように額に入れられてかざってある。――私の曾祖父母だ。

私は曾祖父のことをあまり知らない。ひいじいちゃんは三十五歳の若さで、戦争によってこの世を去った。長男である祖父がまだ、五つの時だった。ひいじいちゃんは腕っ節のいい大工で、みんなから頼りにされていた、リーダー格の存在だったという。それなので、特等生しか選ばれなかったという海軍に出兵した時は、みんな喜んだそうだ。――それが十七・八歳くらいの時だった。

曾祖父は中国にも長崎の呉にも出兵していたそうだ。そして、戦争が激しくなると、家族を守るため、自ら望んで沖縄に戻り、米軍と戦った。そして、喜屋武岬の方で亡くなったという。遺骨は、今でもみつからない。最期まで戦い、ろくに息子を抱くこともなく他界していった曾祖父は、今もなお喜屋武岬で眠り続けているのだろうか。

曾祖母は夫の死を、一通の手紙で知ったという。「キャンミサキニテ死ス」手紙にはこれだけしか記されていなかったそうだ。くわしい夫の最期を聞くこともなく、誰にも知られず散っていった夫の遺骨をあつめに、曾祖母は喜屋武岬まで行ったそうだ。しかし、夫の遺骨はみつからなかった。だが、死の刃は夫だけにとどまらず、息子（祖父の双子の弟）実の姉…と、様々な人にふりかかった。

戦後愛する人を失い、何もない焼け野原で、頼れる人もいない上に、まだ幼い息子二人をつれたひいおばあちゃん。悲しみにたえ、自身が、明日を無事に迎えることができるのかすらわからないのに、息子二人を養うべく、闇市場で時計やたばこを売り買いしていたひいおばあちゃんの苦労は、はかりしれない。きっと、苦労だらけの生活より、死を選ぶほうが楽だっただろう。今、私が生きているのは、あの時ひいおばあちゃんが、どんなにつらくても、苦しくても、生きることをあきらめなかったおかげだ。

祖父によると曾祖母は学校に行きたかったらしい。戦争で学校に行くことができず、字の読み書きができなかったという。戦後も自分のやりたいことは二の次、三の次で、女手一つで二人の息子を育て、命のバトンをつないでくれた。

私は、最期まで家族のために戦いぬいた曾祖父。そして、生きることをあきらめず、命をつないでくれた曾祖母。そんな二人のひ孫であることに誇りをもっている。私の考える平和とは、誰もがあたり前のことがあたり前にできて、笑っていられる世界のことだと思う。家族といたくても、いっしょにいられず、戦場に立たされた曾祖父。愛する人を亡くし、命をつなぐため、やりたいことができず、十分な教育をうけることもできなかった曾祖母。戦争は多くの人の夢をうばっていく。もう二度と、こんなことをおこしてはならない。どんな正義があろうとも、どんな理由があろうとも、人の夢をうばい、血を血で洗う。そんな戦争、そんな事は、絶対にあってはならないのだ。しかし、今、そんな戦争の記憶が風化されつつある。ロシアのウクライナ侵攻も、ガザ地区情勢もその証だ。曾祖父母の思いをつなぐためにも、世界中の人があたり前のことができて、笑顔でいられる未来を、みんなと共に語り合っていきたい。

「今、君達は平和かい？」

居間にかざられているりりしい曾祖父母にたずねられる問いに、胸を張って「はい！」と答えることができる日まで。